

特別記事

パーヴォ・ヤルヴィの「いま」

トーンハレ管の認知度を高めるのが使命

取材・文：中東生
Text: Grinobu Naka

各国の新型コロナウイルス感染拡大防止対策に翻弄されながらも、可能な限りの積極的に音楽を発信し続けているパーヴォ・ヤルヴィ。4月16日にオランダ、アムステルダムでのコンサートへボウで500人の聴衆を動員したロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団とのコンサートをライヴ配信した4日後にインタビューした。

コンセルトヘボウ管との配信

「アムステルダムでは指揮している表情がいつもよりエモーショナルな気がしましたが、聴衆の存在が大きいからでしょうか。」

「とてもいい演奏になりましたが、いつもよりエモーショナルだったという感覚はありません。私は音楽を自然に感じたままの表情やジェスチャーをしているので、そのときにそれだけ音楽を感じていたのでしょう。でも、おっしゃる通りここでは1年ぶりのコンサートで、それは感慨ぶかいものではありません」

「観客席が間引かれた場所に丸テーブルが置かれ、ドリンクを持ち込める形態なのが、あなたの開かれた音楽に合っていたので、音楽監督を務めていらっしゃるチューリヒでも取り入れませんか(笑)。「これは聴衆の数が減らされた場所を埋めるためにコンセルトヘボウでは以前から使われていた方法ですが、そうですね、いいアイデアです。それぞれのホールや国の決まりがあり、すべてのコンサートではできないと思いますが、チューリヒ

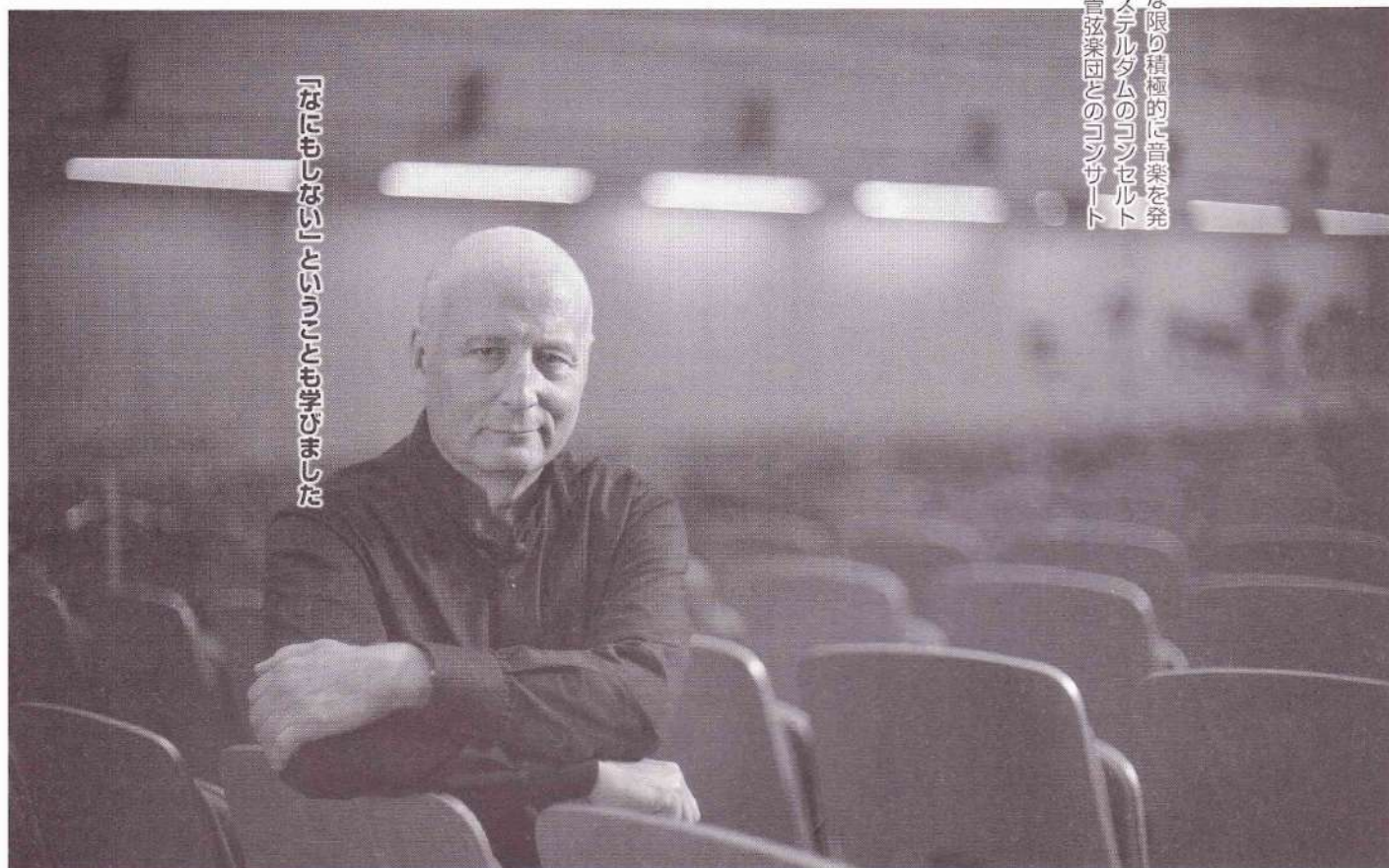
The interview with Maestro Paavo Järvi

「でも取り入れてみましょう！」

コロナ禍はポジティブな体験

「スイスではようやく50人の観客が入れるようになりませんが、無観客のコンサートでも精神的にライヴ配信したり、メッセージ動画を発信したり、コロナ禍でも諦めないエネルギーに力づけられました。」

「チューリヒ・トーンハレ管弦楽団の一員となつて、沈黙の時代にも存在感を失わないでいたいと思う一心でした。コロナ禍はだれにとつても喪失をもたらしました。私も指揮する機会がグッと減りましたが、それでも同僚と比べればまだラッキーなほうで、ロックダウン中も、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団やパリ国立オペラなどからストリーミング配信をしてくれました。そんななかで、いちばん大きかったのは自分のための時間を得たことです。ここ15年から20年ほど、2〜4年先まで決まっているスケジュールを常に追いかけて生活してきました。それが突然止まって、考える時



「なにもしない」ということも学びました

トーンハレにて ©Alberto Venzago

間ができたのです。自分にとってなにか大切な、なにが必要か、ものごとの優先順位が見えてきました。子供と過ごす大切な時間も得られました。そして音楽的にも、スケジュールに追われていないと、勉強の仕方が変わるといふ体験をしました。いままでも常に新しいレパートリーを勉強していましたし、ロックダウン中も毎日、音楽の勉強を続けていましたが、上演スケジュールがないと自由に勉強を広げていけるのです。『なにもしない』ということも学びました。この体験が、今後10年先、うまくいけば30年先までも活動していくための貯蓄になった気がします。そういう観点から見ると、私にとってコロナ禍は有意義でポジティブな体験でもありました。もちろん、私より多くのものを失った人がたがっているのは承知しています。でも、私は後ろを向かず、前向きに進んでいきたいのです」

N響とバル又音楽祭

「そうは言っても、NHK交響楽団を振りに行かれないのは辛いです。もう1年ほど日本に行くことが叶いません。次も6月に予定されているのですが、日本政府の水際対策が緩和されるかどうかにかかっています。N響はもちろん、私が首席客演指揮者に就任する前からすばらしいオーケストラでしたが、共に奏でたこの6年間で柔軟性と音楽の作りかたが発展し、世界の聴衆を惹きつける存在となりました。それには欧州ツアーや録音、香港などのアジア・ツアーも効を奏しま



「ブラハの春2014」に出演したときに ©Zdenek Chrapek

した。録音はR・シユトラウスから始まり、ストラヴィンスキー、バルトーク、ムソルグスキー、ワーグナー、そして武満徹といった重要なレパートリーを構築することができました。エストニアの文化普及にも重点を置きました。エストニアはご存じの通りの小さな国ですが、そのわりには優秀な音楽家を多数、輩出しています。いまはIT関係やビジネスも発展していますが、国際的なアクセスも持たない人たちがまだ大半です。エストニアの若者には才能のある者が多いものの、それを伸ばすチャンスが与えられていません。幸い私は父や国際色豊かな先

生に教えてもらえたので、今度は自分がエストニアの民間大使として教育に力を入れていきたいと思っています。そのためにバル又音楽祭を創設したので、日本のみならずにもっといらしていただきたいです。そして、N響とはまだ実現できていない興味ぶかいプロジェクトがあったので、最後にもう1年契約を延長したのですが、コロナ禍のために、計画していたすべてのプロジェクトを実行する時間はなくなってしまうました。でもN響の意向も汲みながら、そのなかでいくつかは遂行しますので、これからのN響定期に注目してください」

チャイコフスキー・プロジェクト
——録音といえば、トーンハレ管とのチャイコフスキーが2枚発売されており、とくに新しいほうの、「交響曲第2番」「第4番」のCDの新鮮な美しさは心に沁みわたっていきます。

「このチャイコフスキー・プロジェクトは6曲の交響曲を通して、作曲家の心の移り変わりに深く斬り込んでいくことを目指しています。とくに、初期の交響曲は管弦乐的に弱いか、つまらないと言われていますが、私は断じて反対意見を唱えます。いままでの伝統的演奏にただ従っているとコピーになり、アカデミックに追求するだけだとつまらなくなります。でも、たとえば『第2番』など本当はともチャイミングで心打つ曲なのです。フィナーレが弱いという主張も聞かれますが、最適なテンポを見つければ素敵に仕上がるのです。そして作曲家の内なる世界をのぞくことができるので、チャイコフスキーの好きな人にこそ聴いてほしいです。トーンハレは改装中のホールももうすぐ開館し、新しいスタートを切ります。トーンハレ管は限界を知らない、世界で有数のオーケストラです。それに比べて地元での知名度はまだ低く、若者にとっては『宝の持ち腐れ』状態です。オンライン配信やCDを通して認知度を高めることが私の使命だと思っています」